



夾  
林  
集

5  
1801





八五  
1801

味  
系

麦  
浪  
校

八五  
1801



5  
1801  
卷



麥林集卷五

神祇

天神奉納

考も之枝を習へ梅を辰  
菊枝よりふいば枝の梅は  
色秋の目をそんとし梅の





枝もその昔尋ね身や梅の葉  
秋も詩も心替の葉や梅乃不  
回又細に百練日の新や梅を底  
白るや苔も流く神も浮  
下梅も雪も 七五急の初考り  
所はれ日と下行く自互作  
孰はき酒の白も花神は  
糸の花も雪は方と梅の糸

神月や梅も花とく 園中  
神の蔵をひきまや梅の白も  
柳ハヤ果枝皮の形や梅の糸  
はの房も花も思くや子も花  
下ハ花も思くや梅も花  
信心の流んせくや梅乃花  
深も乃白んもさく梅乃花  
神頂の枝も雪の梅乃花

梅乃花

梅乃花



苗代や侍身のきよきとのつゝ  
初まゝの酒やうけうゝるみまふ

北野奉納

木の石ゝ給ふに名ふや明き

菅神八百年忌

花梅やまゝのふゝ八石の青

初鹿五神奉納

そさゝの柳はるるれも中のみ

少時奉納

神頂や百味磨か不流 極

二月末のふり、草履の神々也

神頂や草本白いゝ又蝶乃奉納

北野奉納

涼しさの紙屋川をこまに奉納

北野奉納三物

燕十百衣れ連や思ぬ 織



いよ流むらふ末はら苗代

花のやうにけりしうみ秋のゆき

月次初會云神子納

いよ流や蛭のやうとそれ白く

加良例の社子納奇伝の漢子

物言やゆふを多に伊勢の酒

蓮山八幡まを納

朽子夜をれ流んやと男う

皇合社を納

是と又能のま婦や二つ

宮字奉納

うま細や是と神代の一系

加良例を納

喰て是てハ踏く神の海

ちよ神集り

八し女十袷おまやうり

整



四 是名の社を納

まよふまゝいこころ 女言部 公見

加え例社奉納

俊貝も吸や子種ゆ神は奴

弘の神明を納

神取やふし〜 米かき〜 弘の宮

後又神明を納

鏡子の尾を〜 襦又申はりのまゝに

三 是鷹奉納

弓の類は白羽ゆき〜 何

喉流神〜 まよ〜

卯のふも〜 忌木のき〜 尾に

初名神依神明を納

ハこめい田よ調ふ〜 互神集

祇若々々

あけほのやま戸山〜 祈り電花

五

五



神流山の系を以て云ふに詠く

系系とも又百枝の類や五丁川

丁十日社奉納

坊女やともるまの念ハ枯に

関系井原社奉納

鰯も尾く取くや神直

伊くら石ま

お代の神も有るや伊くら石

夏山と十二一やけら石

神の系

又位跡も交るや根の神系寄

星名社奉納

日向や根の系系に根硯

大和社奉納

系系ともててて子の神系

日向社奉納

〇奉納

〇



秋もろや隣子茶の神門(六)

談別

蓮二法師を送れ

吾孫のほろや解々又とく

涼菴を送れ

水鏡もぬるいあ〜孫の宿

桐甫

浦〜歌のふに尋き時

荻二坊

名の及いあし〜孫の歌〜

桐甫

萩をい〜孫波子向や歌〜

桐甫

三



出羽省七、

卯のむと道のあうりや何百里

夏濃のふと伊勢よ志何く  
そゆらんしえりぬりやえ  
ゆらんしやうし時

亦日とハ牡丹れうそのふとく

巴国の人れ之態映れ卦をさる

解不んそぬ道の便れきうけく

秋のむれ雪満そめく

秋のむれ雪満そめく

汗サス、

おやうくの連よハ早く秋の旅

秋のむれ雪満そめく

そらふちをみふたふのまほく

芭蕉に依り、

見あうりやふの天まればあうり



若女、

時ハハ一羽の富士もふの、ち

こね、聖仙、

道ノノも只ハハ一色さ一、 ちの事一

山セの流ノ卦ニ送レ

朝ハ又卯のむれちら、 時

素直ノ長條ノ京師ノ卦ニ送ル

行方ニ修羅ノいろり、 ちの事一

芦花ノ卦ニ送ル

道ノノや大付、 ちの事一

秋支ニ送レ

茶を流ノ流ノ、 ちの事一

若女、

河ノ子ハ先子縮の考レ、 ちの事一

若子ノ初ノ卦ニ送ル

河ノ子ハ先子縮の考レ、 ちの事一

若女、

若女、



花奴一

夏夕之の仰向そふにさう花うら

何處の素雪とことんかかす

彼ハ伊勢ふたすハサ萩系子

そまきね

萩よちりもサ萩子とあつち萩ちり

小豆月のれおねの芦花を流さる

舟月のもさきねふさちりうら

何處にありし時あきつー

漢やふりやまは

そりそはむいへいへいへの

古山のちかたをさる

花の中し先とつらに花をさる

花奴一

花夕之の中は海とく風中

花奴、外くそ方を流さる

花夕之のこころ向時何さあ

花奴一

花奴一



系ふり山伏を侍しく之態形よ  
訪ねて送しぬ

そくけし皆中は敵く山道に  
治と到く人を送しぬ

そけいとの歌白りや 同く白ぬ  
甲昆と到く人を送しぬ

便也よ時るく此富士の歌  
系及てをらる

朝の野の花いふ夕暮に  
同人を送る

晴よ夕暮くゆくこめくまの夜  
中睡う後と到て送る

系をうけりこの外に 取次  
系心花を送しぬ

長閑な朝の暮いりく 後田川  
同書く系良と到て送る



馬場 坂やから花のよきふてもよき春  
馬場 坂のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春 白田

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春

花のよきふてもよき春



五探と云ふ

ゆきの吹流とて夏も浪波

尾の之子の宿程おしと云ふ

よるよるの道程かきんやと云ふ

古山と云ふ

まの山と云ふ

花の波と云ふ

川みよの流と云ふ

花の

おのれと云ふ

系心の流と云ふ

まけの流と云ふ

勢と云ふ

おのれと云ふ

系心の流と云ふ

おのれと云ふ

下

日



きんのもろを侍志

やうくくの躍うこう留を替船舟

麦更をさる

ふんきれ流も濁るはふゆま

東武ゆ何系

紫うけやうはゆ山れきふふ

東崇ゆ中ふく卦をさる

夏くきき流の流るる

弘の一酒をさる

神風やうけのまの帆も夏日如

かびの戸桐をさる

旅うらのうらうら〜〜田徑

朝きそを皮は年丁

佃つこ入くうり産業

心とよめんはよれうをさる

夕よ象浮とけりよのふけ

ひうりきこれい志きりは源

の志をさる〜〜あはま

田



宗のやりきしにふりて  
れ枝よとみ陸のちと  
たしき着せりる

浅きはちや一しうは

十方庵のちんは衣の  
印のむれ雪を瑞初  
十とせよぬきり  
の深泊いあくしの  
あしむらひもそと  
りぬくれ雪のちん  
心細くそるは

初男や流外鳥ハ

女中とけいりる古山を

縁をぬくよとみ

か君とあをさる

白ねいさるは

ねん長か君とあをさる

涼しやと門あしう

ゆの千丈は師善林の

ゆの千丈は師善林の



ふくまのまじりかたはくまのまじり  
月のまじりかたはくまのまじり  
紙衣の襦袢はくまのまじり

それよと別くせくまのまじり 襦袢

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

時よと海をくまのまじり 襦袢

かまのまじりかたはくまのまじり  
くまのまじりかたはくまのまじり

かまのまじりかたはくまのまじり

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

まのまじりかたはくまのまじり

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

まのまじりかたはくまのまじり

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

まのまじりかたはくまのまじり

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸



情にうらみはるるに画なり  
くははるるに示れ

はきくの程に梅のそよひ

湖のそよひ

はるるに梅のそよひ

そよひ

はるるのそよひ

はるるのそよひ

一秋風はるるに梅のそよひ  
道下りてはるるに梅のそよひ  
そよひ

時をたぬく梅のそよひ

梅の侍をたぬく梅のそよひ  
きく梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ  
梅のそよひ

梅のそよひ

梅のそよひ



袂を却て見ればかき置かれ  
孤舟よゆ後の静けさ  
—— 翌日の水戸に  
をかくるらんや

獨貝くあや二尺、張、ゆ、ふ

きりきりの末に、左帳に訪  
きりきりするそのは、  
再とせんところきり

あまの霞よ待たぬ、燕、く、ゆ

何系山、武の首を、

かろい流の夏、一富士、初、か、子

ん、花、の、お、ま、さ、る

涼、さ、の、日、記、待、り、や、古、傳、記

ゆ、花、と、ま、さ、る

子、嘆、も、あ、け、や、新、時、を、中、休

信、長、梅、二、と、ま、さ、る

信長梅

信長梅



十

一居士のよ縁も今もそ友に事

素道にこれと送る

時よも念れ行りしきも流流

賀伯平平いふ大和と送る

ア〜政や涼〜さき〜 晒時

### 留別

素道よ〜人〜よ〜

猿馬認めしる衣袂の如

か名桃妹〜

湯の白ひ硝鬼と結〜

大和よ〜時忘何〜京に

〇

〇



かゝる見ゆるまゝ又家に泊り  
らんくえ〜

まゆら同下もろ三幅の襦

わらゝ底ハ家好先の板を  
おまにわらわ知をそま  
麻の考れそくかきりせきる

同上身に紫こね〜り一麻おま  
競うのほよりまにま  
そ免れの涼風を語よれ

見ゆればやれしたるおの中はま

一着は麻の名おま一麻おま  
まにまま

おまは涼いそ〜色坊に

水す月廿日えり諸を暖まに  
系まに師の一向に思さの日致  
かま〜そ何の名おま情む

二つんよ〜涼〜さ〜るる高野川

大和意に何系〜ら〜わ〜



秋風や秋子清おる樹影の波

尾崎の人しよふと情む

尾崎の清や清よあふく大根畑

秋は若葉の二倍のそとの

くまのれうきる糸よゆるすも

秋はよおきまされい文をきり

清よきまきりく反古の牛乳三入

秋よ清き山よふあきくわく子

秋の樹影の影しよと秋思は  
秋の影をまきく初秋二日に  
秋の名秋をまきあきく

秋風の一秋よ清くくさく如

秋風は向きよよ

秋はくま田子うらうらあふ山よ

秋まき糸よまに秋よ秋は

日ありくまや秋影の名秋を

秋まきよらまの秋何きれ

秋まきやあきん秋まきく秋川



くくふくくくくくくくくく  
字をぬく

よかぬえぬ涼きふくく

ちかぬくくくくく

物とくくくくくく

麥林集卷六

名所

麻子のつりま

とくくくくくくく

里川まきまき  
くくくくくくく  
くくくくくくく

くく

くく







木の葉の音よ〜

雫子回をち〜に響け涼〜

細貝不実あ〜

夏守もろ〜を〜と〜や女帰ふ

心際系のは〜

と〜ハ又〜の海〜と〜り〜

醒弁ユ〜

醒弁ユ〜系〜の破〜

醒弁や草と〜洗〜

弁の里よ〜

玉水や煙〜

〜系お〜

系のお〜

神さ月の〜

〜

〜



曉り梅よ〜

旅人よ羨子や人曉り梅

ほめてほよ〜

卯の節やふい肌鏡之痛り梅

鶯鶯よ〜

けふの内を梅〜羨子の暮

此の彈の里よ〜

聖とまき此名やとて嘆詞の心

三河風よ〜

青峰〜六不夜よ如く妙

幸字よとよ村のよ氏の末にや

夏柳の垣さへ陰〜とをり繁

はふのろよ〜

須磨寺此隈やるむはよ〜行

春名の頃の地蔵の徳よ

よそよりや〜つらきのおよよや

そやふらねと白負の〜と

（巻末）

（十五）





此の柱は...  
予もけ...  
とく...  
とく...

蛇のニ又殿...  
の海

を...  
とく...

今やふく...  
の海

その月...  
一...  
取...  
流...

納涼...  
千...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

玉と...  
の海

...  
...

...  
の海

...

...



河津浦よ〜

舟より藻屑も〜 浪の流

流を眺め田村川を〜

光陰の矢もちりてや田村川

初瀬よ〜

功をや里の隅の化縁坂

三掃よ〜

二りの政れあ〜 や庭の視

三保の河麻の葉よ教いふ

石山の石よ〜

象浮とよ〜

きさ〜

磯の石よ〜

新島〜

新島〜



千夕環

まよ山寺で時を暮らすや千夕環

多幸の旧沢よ

里の子れ回ぬばくしに教へり

船懸奥地より富士峰と見え

詠かほ富士や信濃の一ト産

腕の信水よ

まよ井子回くし腕の信水に

伊勢舟よ

舟のりゆくを今も舟よ

伊勢舟よ

下りけやう船を婦人信濃

里川よ

流子よらん里川の水よ

舟の老の滝よ

百子よをくはく涼く流の道



見よとの名と存せられ  
所下し脚と著ふ所  
も守れ梅堂とれハ

見よのうや実を待守れ梅花

後の双松守西の庵よ

実梅やをふれ梅の所新

善從山よ

五月而や不負七松松流の香

西行谷吟

平後よ瀧のありとも  
そよハ梅よつら

上人のやまぬありは  
尾をこれよほハ

尾をこれよほハ  
尾をこれよほハ

尾をこれよほハ  
尾をこれよほハ

尾をこれよほハ  
尾をこれよほハ

尾をこれよほハ

尾をこれよほハ



はてさて及下尼の法水ノ神  
不四ノみ粉のむくくを存リ  
腕の糸はほく産るやまの  
叶字の生干見らや奇 他衣  
言々事いっしきの地々差の内  
そとに存り人産る糸は破衣  
田位上人の又百々々と云  
くく叶字に存るい

又百々年杖のいさしりく

画讚

蕉子ぬの像

甘乃叶ノくく白之長くく不乃中



菘子の渡

菘子のむれまゝも海に際のは

眉佐の渡

眉孫はあれと眺めろるは面

酒茶のさし

酒茶はさしはあつめろるは

赤林七賢の園

七人の卒をさぬはあつめろる

葡萄のさし

度よささろる葡萄は秋をさぬ

杜若の画

かき紙の蝶と化すや遊子を

天の鶴の画

一羽のまじとぶはくや時を

菘子のさし

菘にいろく物に茶の菘より



仙鶴の談

鶴の子は、白くも、や、白くも、

富士の画よ

く、池よ、い、吸、け、る、盤、け、る、の、む

鬼の首をかき、く、る、同よ

百名の名、れ、鬼、も、志、向、さ、や、夕、嵐

善化、禪、師、の、図、に

し、れ、の、考、ま、く、崔、い、下、に、ま、り、ん、り、り

布衣の談

孫子に、舟、を、と、く、せ、く、く、夕、ま、く、み

人、麻、呂、の、像、よ

その、ま、も、一、部、く、や、く、く、く、の、や、い

ま、い、糸、巻、よ、所、く、を、秋、い

守、也、の、蔓、よ、を、

清、宮、に、傳、え、あ、り、や、汗、を、く、ま、い

仙人の画よ



七巻下

三所くさ北山を次もや漸しづの島  
布袋の園に

しよ似く世もとまに糸はり糸  
水草に鱧をまねけり

藻原きの鱧の寄り一葉くぬ  
初上如をまゝに

可か醒さく箱り又よ一ツ葉  
縮塚子花をまゝに

店よく居社又をまゝや縮花

猿の画  
五枚の糸ハ折まぬ後乃曲

骸骨の形  
そていみれあきさの骨や蚊の目

兔の涙  
何を中何と見く居ぬ乃ま

七巻の涙



七葉に那子孫やうり高塔の致

枯木に鳥の渡

かゆきれる糸の渡りしをよま

多羽の渡

祢豆殿の同じ見やうり祢豆

美草の渡

ゆき渡ぬ蝶や美草の渡り

西の羽渡り

猿渡の糸を見よるは清水の

波の渡り

燕ハ夫婦のやうり

布袋の渡り

号の渡りにやうり

水鏡の渡り

痛入の互にを告げれ

芭蕉の渡り

五

五







老人の生糸より吊る涙と  
くしくれ水よりあふる涙

風や夏より秋も好む夏

初より暮れまで

十うつりの初れよりや暮れまで

猿の画

初梅より寒やま外へ猿の画

此は正月の猿の画

那くもやのすくくを思ふや月の眉

其は正月の猿の画

空よりさるるの影や何れも

子その影に

光陰の子を失くすやそれ事

鳥れ亦は花をまねけは

春の空に花よりや編むる

三番叟の画



種もや秋の種も侍従の種

牛の雨よ

牛の背よと物秋よらや草の花

草花はほら

草の考は整よはるやきうくは

うけといふれまの涙

涙よもるよれはるや秋の草

魚石の涙

晴くは海よこのを初しうは

草花の二尺文臺ハ

西の法抄よきうは

西の杖身もや月日 貝

梅の歌よ文意のあり

るましん

そはそや梅もれちしん

晴るそのふそは

晴る

晴る



月をの目と体とや何となく

花の画子

花子此より〜竹のまゝい

悼

夢とぬれ人の身はうらむに

夢若くははるさぬまはりき

梅のついでにうらむに

梅の泣き向ふ枝の末に

佛の乾くぬ袖にふき

夢に惚つゝも梅はあま



山をふりてゆく人の心へ

面白き路や秋の風を感ずる路

董二坊を悼

月夜を足るは其のや秋の夜

きよの地にふたもくもくとし  
そよ風と人の心のまじり  
を云はし人の心へ

初秋のやそよ風と秋の心

初秋のそよ風と秋の心

辞世の心

そよ風の心と秋の心

そよ風の心と秋の心

そよ風の心と秋の心

涼風の心

何れも心と秋の心

千巻の心

心をいへば心と秋の心



伊の崎帳にも書し居たわ  
驚きぬその浮きまのむら  
紫もよもふくくも向れ  
世の

世の角りあはるる時書

のし景仙のくまきつる

そとゆさみ舟のきまの  
鞠をぬれ人のあはるるに  
そ人を向へる孤九の一ふく

以平の俤

そ森の物くくあはるる  
石てもゆきぬるそふく  
夢にまうく包むるの背

そよ意を伝へるる人の力

ほくくくく

向かへ悔やま程のむら

そき信のあはるるに

一

二



やまは入れぬのくくや高の月

喪の絶ゆる人のきへ

一系は日数廿一は柳一は如

為しとも秋とも同の考そく如

よしぬきつむてくおく一考一水

希同の妻の身両りり如く

伊を此山よりけく甘言を心

一日ふと振るくそふひかく

こつ時で一系の船は晒を

八月二日武蔵よりく方

はるくろく人を悔

たしかしくまにを入里二日月

ふふ心尻う身まよりりり如く

きこく一辞せりやと尋ね

こそれささりりしとやうか

不為文子の考き心と如く

つぎ

三



舟月にあふぬてを 子も老ぬわし

秋好きことの身ゆりしめ

佛の碑もま向よりりく 秋をあらぬ

とそふし割髪しる人よ

入月と後よ法のすこくぬ

冬月とこつぬく子とさうぬ

老母の喪ふぬふ人のいふ

頂上殿本のあふぬては 秋のさる

つひとかがしきよのささよふる

本因をあらしにけむと力

西よりきぬとやぬ

名本の流しとぬやーくぬ

かきへてはさぬと啼やふらぬ

富くぬ人のあさうなるに

その中れ同じ信法外くぬに丹

け着るも口くぬとけけけけ

○秋好

○



妻のちちうりなれり

まきおれんうらぬぬる境ふ

昔ふりてふふりて  
りうきぬれいりりり  
いりいあ

月むよりぬきくぬれぬれぬ

るよ道とぬれぬぬぬ  
ぬりりりり

水仙よりぬぬぬぬぬぬぬ

時言れりや下木のぬぬぬ

芥門自香は師孫月未れ  
六月既子美泉の孫よぬく  
そぬよぬくくぬくく  
すううとふくきく結く  
りそふよ訓し調ふに記ふ  
とれりして何ぬ一ぬをぬ  
くるときぬきぬぬぬ

溜るをぬぬを掃くふりぬ  
冬枯や山ぬてとぬぬぬ



高つんよと西よとくぬ 杖の友

舟の舟はくくろん

男よにまむとくぬし 杖急おん

十方れ道とあろし 中れ

父のむしとつりし

郭巨よハ細ぬ 塚電の極る

蕨よハ物 塚 塚 下あし

社又よ十国

屋白の蔓のちろくや 井此

去よのいしとくぬし 夏あそ

深草元政の塚と

多れ強つんまろや 竹の 鴨牛

双林寺 慈惠の石碑

ふよこの 道とぬあまや 河しき

○

田



懐旧

糸蓮の帆子と波の子とサウサ  
人々も初むくさうなふま

父のむくさうなふま

母ももつとんせりるふれ

曰ふはれ

暮れぬ時とけけてとね

母のふま

秋もそく我はきあつとみる

燕子の涙

まよひぬとまよふや水信を

あまの懐旧

その人の懐旧やまよひを

追加

三月月れをさるふれ

懐旧

懐旧



美りもよれ入も中よ〜〜にりた月

うれこほよふ〜〜

はる原の月よも然らるる川

孤の鳥角之通よふ〜〜

老の月よらんすろこけ〜〜も 楓

祝考ま細

るよも不も瑞言の細れま〜〜

自道庵之記

于茲宗人ありそぞ神河川の標下  
のうたまたにれ流はけまの年とほよ  
やうきさうの地を記すは或は若法  
時と極〜〜ゆはまき者よふとあり  
信者〜〜そととの眺るにそと  
まき〜〜はらやまにあり〜〜



唾とと古き詞は仔細とや  
そききふふらん昔は細情の  
まうかしく四時を暮れとわら  
けつと反古のけしよと云ふ  
けり

しのすまゝときれよよか  
あはれあはれあはれあはれ  
消えんはれはれはれはれ  
あはれあはれあはれあはれ

いかにしとせよよと云ふ  
何同よよとせれあま  
よよよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ

いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ  
いかにしとせよよと云ふ







とにりよ美月（夢）の望ハ從名（手）よあふ  
根りしえ

狗中とわく移よ、移の月  
藤ハ何ウ獄何ウ名と囁けけ  
明あし〜〜あ〜の色考もは  
りよすによとあつとやのあま  
らや時言のなよか〜〜  
後をふよ常そつてい〜のむ〜

をいぬをきささ〜しよ移リン  
洪豆のあれき〜ん〜あお  
ま〜〜只室中にあま〜初祀  
の画像よ今〜〜あ〜の〜  
合と〜あ〜ぬ、

かけあれ其の何〜〜やう大蛇

（表）F

（裏）



後序

先人の遺徳を以て市中に  
市中にありあり田畠を  
園ハ圃と云ふは  
多岐を以て苗圃種を以  
て白米を以て種と云ふ  
四時子息を以て種と云ふ

（左）

（右）

（左）

（右）



と 訪ふ 証 彼れ 諸 君に  
草 指せ 休め 凡 岷 阿 野に  
郊 外に 道あり 一と 藪 秋  
の 叶に 留る 凡 あり 八道 祀 神  
よ ち 子 子 子 子 子 子 子 子  
同 子 絶く 底 底 の 月 張  
昇 一 吉 神 子 子 子 子  
り ち ち ち ち ち ち ち ち

と 訪ふ 証 彼れ 諸 君に  
草 指せ 休め 凡 岷 阿 野に  
郊 外に 道あり 一と 藪 秋  
の 叶に 留る 凡 あり 八道 祀 神  
よ ち 子 子 子 子 子 子 子 子  
同 子 絶く 底 底 の 月 張  
昇 一 吉 神 子 子 子 子  
り ち ち ち ち ち ち ち ち

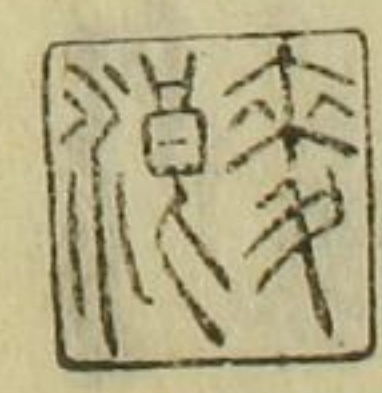
十  
〇

⑤ 校



一十  
〇  
小冊子

王多良之



京寺町二條

橋屋治兵衛

江戸浅草御堂前

辻村五兵衛

梓行







